



Title	談話標識についての一考察：「だから」を中心に
Author(s)	谷崎, 和代
Citation	大阪大学言語文化学. 1994, 3, p. 79-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78151
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

談話標識についての一考察

——「だから」を中心に——*

谷崎 和代**

Discourse markers not only link utterances with preceding ones, but also provide signals on how to infer implicatures from the context of those utterances, informing the hearer about what kinds of speech acts and propositions to expect. Furthermore, because discourse markers function as a means of holding turns and yielding turns in the turn-taking system, they play a crucial role at the level of communication.

In conversations in natural settings one of the discourse markers of Japanese, *dakara*, exhibits a great variety of functions in addition to the generally acknowledged one of leading to conclusions and results. However research into the functions of *dakara* in actual conversation is at present extremely rare.

The research presented in this paper is an explication of the functions of *dakara*, taking as its object instances of use of *dakara* from a corpus of a broad range of conversations. The communicative functions performed by *dakara* were analyzed on the basis of semantics and pragmatics. The functions of *dakara* were divided into three semantic categories and into five pragmatic categories. It is observed that, in all categories at the most basic level, the propositional meaning of logical relation is always preserved.

* An Analysis of the Japanese Discourse Marker *Dakara* (Kazuyo TANIZAKI)

** 言語文化研究科博士後期課程

1 はじめに

統語論や意味論はことばを解釈するにあたって、その前後で話されたことや話される場面といった、文脈を捨象した言語形式の文字通りの意味について言及するが、実際のコミュニケーションの場を考えると、言語形式によって直接言われている以上の意味を理解しなければならないことがあまりに多い。統語論・意味論といった従来の文法の整備が進むにつれて、それだけでは人間の言語理解を説明することができないことが徐々にわかってきたため、文脈を考慮に入れ、そこから引き出される意味についても考察する語用論の研究が近年本格的になってきている。

このように、従来の文法レベルに留まらず、語用論的解釈も行ないながら言語を取り扱っていかうとするのが筆者の基本姿勢である。すなわち、発話行為¹⁾会話の含意²⁾、相互作用的機能³⁾といったものも考慮に入れて文脈の中での発話を取り扱う。

談話標識の研究の必要性について、(1)の会話例を用いて明らかにしたい。

(1) 母親: ようこちゃん、今、おつかいに行ける?

娘: ええーっ? 今、本読んでるの。

(1)で、娘がまず、「ええーっ?」と言っている。この「ええーっ?」を聞いただけで、気の早い母親なら後続の発話を聞かずに、「あっそう、じゃもういい、頼まないわ」と言うかもしれない。それくらいこの「ええーっ?」は、前の発話、即ち母親の発話に関連性を持たせてつなぎ、娘の会話の含意を推論させる引き金となっている。

¹Austin のいうところの発話内行為 (illocutionary act) のことで、何かを発話しながら、同時に何かを遂行する行為を指すが、必ずしも明示的遂行動詞が用いられる場合だけではない。

²Grice の協調の原則 (co-operative principle) に一見違反しているような場合でも、深いレベルで守られていると解釈されるとき、会話の含意 (conversational implicature) が伝えられている。例えば「今晚パーティに行ける?」という問いに対して「明日試験があるの」という答えは一見無関係なことを言っているようであり、協調の原則の一つである関連性の原則に違反しているように見える。しかし、文字どおりの意味のほかに言外の意味、すなわち今晚勉強しなければならないからパーティに行けないという意味が引き出される。

³Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) が提唱する話者交替システム (turn-taking system) において turn を保持したり譲渡したりする機能を、本考察では相互作用的機能と呼ぶことにする。

つまり表面的には母親の質問に対する返答という行為を導き、一方では母親の依頼に対して断りという行為を導いている。また娘は、母親の「おつかいに行けるかどうか」の質問には一見答えていないように見えるが、「本を読んでいる」と理由を述べることによって断りを含意しているわけである。返答という行為のように、言語形式から明らかにわかる発話行為を表面的行為⁴⁾と本考察では呼ぶことにする。しかしコミュニケーションといった面から考えると、返答というよりも断りの意向の方が聞き手には伝わりやすい。つまり、表面的行為だけでは談話連鎖の首尾一貫性が説明できない場合、コミュニケーションの中心となっている行為、ここでは断りという行為に基づいて発話を解釈しなければならない。このような行為を基底的行為⁵⁾と本考察では呼ぶことにする。さらに、質問・返答という隣接対の返答のマーカーになっており、発話の順番を取るという相互作用的機能がある。

ここでの「ええーっ?」は応答詞と呼ぶべきかもしれないが、従来の接続詞だけではなくこのような語も含めて談話標識と呼ぶことにする。談話標識は現在の発話を前の発話に結び付け、文脈から会話の含意を推論するようにシグナルを与え、聞き手がどんな命題⁶⁾や発話行為(表面的のみならず基底のレベルも含めて)を予期すべきか前もって教えてくれるだけではなく、話者交替の起こる会話の構造上相互作用的機能も有するので、コミュニケーション上重要な役割を担っている。

このような言語伝達の遂行と深い関わりを持つ談話標識を研究することは、言語伝達のメカニズムの解明という観点から非常に意義がある。

2 本考察の目的

上述のとおり談話標識は多岐にわたる機能を持つにもかかわらず、特に文法分野ではあまり認識されず、実際の会話で用いられているものも注目を集めることがなかった。そこで本考察においては、コミュニケーションを行なう上で重要な役割を担っている談話標識に焦点を当てることにする。

日本語の談話標識のひとつ「だから」は、一般には結果・結論を導く条件接続あるいは順接の接続詞⁷⁾とされているが、それはあくまで書きことばにおいての

⁴Stubbs(1983:147-75)はこのような行為を surface act と呼んでいる。

⁵Stubbs(1983:147-75)はこのような行為を underlying act と呼んでいる。

⁶発話が表現する基本的意味(proposition)

⁷『日本国語大辞典』によると、「だから」は「先行の事柄の当然の結果として、後続の事柄

ことで、実際のコミュニケーションの場では他に多様な振る舞いをしている。因果関係を示すだけではなく、文脈によっては様々な語用論的機能を有している。それは、文脈から引き出される会話の含意や発話行為を予測させる機能であったり、話者が交替する会話の中では相互作用的機能であると考えられる。

このように、「だから」は多くの機能を有しているにもかかわらず今までほとんど研究されることがなかった。特に自然な状況で起こる日常的な会話データを用いた考察は極めて少ない。したがって本考察では、できる限り実際の会話データをもとに「だから」の機能解明に努めたい。

3 談話標識についての先行研究

談話標識の研究は、英語の方が日本語より先行していて、van Dijk (1979), Schourup (1985), Schiffrin (1987), Blakemore (1987)などにその成果が見られる。談話標識をそれぞれ、*pragmatic connectives*, *particles*, *discourse markers*, *discourse connectives* と称し、それぞれの枠組みで考察している。

「だから」については蓮沼 (1991)が、ドラマや映画のシナリオを自然に生起する会話データに近いものとして分析を行なっている。「だから」が結論を導くものと、それ以外を導くものの2つに分け、後者についてはさらに下位分類を行ない、前の話者の発話意図を明確にするよう求めるタイプと、前の話者に正しい理解を求めるタイプに分けている。いずれの「だから」も対話の相手に論争を挑む際に現われ、「だから」が本来有する性質は論争的であると結論づけている。確かに論争的な「だから」も多く見られるが、自然な会話データを観察すると必ずしも論争的なものばかりとはいえない。恐らくデータがドラマ・映画のシナリオといった人為的な会話に限られていたため、「だから」の機能として浮かび上がってきたものも限られたものになったのではないかと推測する。

Maynard (1989)は、自然に生起する会話もデータに取り入れ「だから」の機能を分析している。それによると「だから」は、原因／結果の関係を表す機能と談話のモダリティ標識の機能を有するとしていて、後者の機能は、先行する談話から明らかになっていることに関連性のある説明を付加するためのものであるとしている。結果を導く機能以外は全て説明の付加を行なう談話のモダリティ標識と単純化しているのである。

が起こることを示す」とある。

4 本考察の方法論と「だから」のデータ

「だから」についての2つの先行研究はいずれも、結果・結論を導くものとそれ以外を導くものに分類した後の分析がきめ細かさに欠ける。本考察では「だから」の前後の命題間の関係で「だから」を分類し、命題の意味では「だから」の機能を特定できない場合、発話行為同士の関係に着目し、その際表面的に遂行される行為と基底の深いレベルで遂行される行為を区別しながら分析する。そのことにより会話の含意のシグナルとしての機能も明らかになる。さらに「だから」の前後で話者交替がある際には、いかなる相互作用的機能があるのかも見ていく。以上のように意味論的な分析と語用論的な分析を組み合わせ、特に後者については表面的及び基底の行為と相互作用的機能を分析のための枠組みとする。

データについては、(1)筆者の周辺で行なわれた実際の会話を録音し筆者が文字化したもの、(2)テレビの対談番組を収録し筆者が文字化したもの、および(3)対談が文字化され出版物となっているものといった実際の会話データを主に用い⁸⁾、一部二次資料として、(4)映画・テレビドラマのシナリオといった人為的会話データも用いる⁹⁾。それらの会話データを分析し、機能別に範疇化を行ない、さらに分析を深めその機能を明らかにしていく。

5 分析結果

前節であげたデータをもとに「だから」を分析するにあたって、まず「だから」の前の命題と後の命題の関係によって分類を行なった。命題の意味から分類できるものは同一話者により「だから」の前後が発話されているものであり、一見話者交替が起きているように見えるものでも、同一話者の前の発話の命題と現在の発話の命題を何らかの論理関係でつないでいる。しかし命題の意味では「だから」の使用の説明がつかないものが多くある。それは「だから」の前後で発話者が異なる場合で、コンテキスト内で起こる2人の話者による相互作用といった語用論的観点から分析しなければならない。このように「だから」は、命題の意味から

⁸⁾5節の分析結果で、会話例に出典を明記していないものは全て(1)である。『徹子の部屋』は対談が出版物になったものであるから(3)に属する。

⁹⁾本考察では人為的会話データからの会話例もかなりあるが、分析の対象となったものは圧倒的に自然に生じた会話データが多く、詳しくは谷崎(1992)「大阪大学大学院言語文化研究科修士論文」を参照。

分析できる意味論的機能と文脈を考慮に入れて分析しなければならない語用論的機能の2つに大きく分れることがわかる。

語用論的機能というのは、命題というより発話行為を導く機能であり、その行為も表面的に遂行される行為と、同時に、コミュニケーションにおいては特に中心となる基底の深いレベルで遂行される行為がある。また、「だから」は話者交替の起こる会話内で生起するのであるから、語用論的機能には発話の順番を確保したり譲渡する相互作用的機能もある。以上のような命題間の論理関係を表す意味論的機能と発話行為を導く語用論的機能を、それぞれさらに導かれる命題別、行為別に機能分類した結果、以下のようなになる。「だから」の機能についてひとつひとつデータをあげて例証していくことにする。

「だから」の意味論的機能

5.1 結果・結論を導く「だから」

「だから」は前後の関係が、原因／結果あるいは理由／結論といった接続関係を明示する接続詞と一般に認識されている。実際の会話でもそのような機能で用いられることが最も多く、典型的な例が次のようなものである。

- (2) A: 男の人って女の人の使い方知らないもんねえ。
 B: a. そうそう、うちの会社なんかも全然知らんねん。
 b. だからね、うちの大卒の女の子が全部つぶれて辞めんねん。

5.2 一般化を導く「だから」

前の発話を一般化したり抽象化し、総括的にまとめるときに「だから」が用いられる。

- (3) A: a. 今は、お子さんの方からお母さんの方に、接近してくるという気配が見えるんでしょ？
 B: b. はい、最近になってやっと、そういう、まだ、こないだまでは、ほんとにひどかったんですけども...
 A: c. だからね、あのう、それはね お母さんの、この子の方が見方がね、あの、変わったということですよ。
 B: d. そうですね。 (電話相談、NHK)

(3c)は、前に言ったこと(3a)を一般化して言い換えている。「子供の方から母親に接近してくるように見える」という具体例を、「母親自身の子供に対する見方が変わった」と抽象化して説明している。

5.3 具体化を導く「だから」

抽象的に述べた前の発話を、具体例をあげて説明するときに「だから」を用いることがある。

- (4) A: a. あのう、この状態でね、お父さんがね、子供を支配しているわけだからね
 B: b. そうですね
 A: c. ね、だから...あのう...自分に気に入ったことをやってる時には、お父さんおとなしくてね、気に入らないことがあるとね、あの、いきなりね、お父さんが、子供がきばをむいてるん じゃなくてね、お父さんがきばをむくわけだから。
 B: d. そうです (電話相談、NHK)

「父親が子供を支配する」(4a)とはどういうことかを、具体的に(4c)のように説明している。

「だから」の語用論的機能

「だから」の語用論的機能については全て次のような共通の特徴がある。まず、連結されるのが命題というより発話行為で、その際、表面的行為と基底の深いレベルにある行為に隔たりがあるため、会話の含意を理解してはじめて談話の首尾一貫性が保証される。この含意は韻律的特徴を伴うことがほとんどなので、聞き手にはむしろ含意の方が話者の意図として伝わりやすいという事実がある。次に、相互作用的機能として会話の構造上、発話の順番を確保したり譲る装置として機能する。

「だから」が、以上のような共通の語用論的機能を有していても、その根底には前件から後件を導くという命題の意味が保持されている。つまり、談話標識の直前に明示的に表されているとは限らないが、言語的あるいは非言語的なものを前件とし、話者なりの論理で後件を導くという論理関係を表している。

5.4 結論の明確化要求を導く「だから」

表面的には対話の相手に対する結論の明確化要求という行為を導き、基底のレベルでは、結論を見抜いたうえで反発や挑戦的態度を表明するという行為を導いている。相互作用的には会話の構造上、発話の順番確保の手段として機能している。

(5) 尚子: 止めてよ——みんな、見てる。

三上: だから?

(東京ラブストーリー)¹⁰⁾

みんなが見ていることから引き出される結論を明確にするよう要求するのが表面的行為で、同時に基底のレベルでその結論を見抜いたうえでそれに対する反発を表す行為が行なわれている。結論要求であるから、論理関係を表すという意味も残されている。

5.5 省略された結論を導く「だから」

表面的には結論を言わずに発話を中断するという行為を導き、基底の深いレベルではためらいの態度表明や話の引き継ぎ要求という行為を導いている。また談話標識の後、話者交替を生じさせ発話の順番を譲る相互作用的機能が「だから」にあるのがわかる¹¹⁾。

(6) 永尾: 俺、もう関口が辛そうにしてるとこ、見たくないんだ。
だから.....。

さとみ: うん。

(東京ラブストーリー)

永尾は結論を言わずに発話を中断し、深いレベルでは全て言語化してしまうことへのためらいを表現している。この基底的行為は、韻律的にもストレスのない消え入りそうな発話のしかたを伴っていることからわかる。やはり結論の省略であるから、この場合も論理関係を表す機能が残されている。

5.6 推論した結論を導く「だから」

表面的には対話の相手の発話から推論した結論を確認するという行為を導くが、基底の深いレベルでは相手の発話に注意を傾けていることを示す、協力的態度の

¹⁰⁾ 坂本裕二(1991)『東京ラブストーリー TV 版シナリオ集』 小学館

¹¹⁾ Schiffin(1987:217-27) は 'so' の相互作用的機能の説明の際、このような機能を発話移行装置 (turn-transition device) と称している。

表明という基底的行为を導く。相互作用的には会話の構造上、確認の後発話の順番を譲る装置として機能する。

- (7) A: 電車の本数は少ないし、駅からは遠くてバスもないし、雨なんか降ったらもう大変。
B: だから車が必要というわけか。
A: そう。

Bの発話は、Aの発話から推論した結論が正しいかどうか確認しながら、同時にAの言いたいことを察して協力的な態度で聞いていることを含意している。確認に対するAの返答「そう」が直後に続き、相互作用的に「だから」が発話移行装置として働いているのがわかる。この「だから」も結論の確認を行なっているわけであるから、論理関係を表しているといえる。

5.7 返答を導く「だから」

質問に対する答えの冒頭によく用いられ、表面的には返答という行為を導き、基底の深いレベルでは話し手の知識に照合中(5.7.1)、または先行する談話といった共有知識に照合(5.7.2)、あるいは常識やお互いの了解事項といった共有知識に照合することを示唆する(5.7.3)という基底的行为を導く。「だから」の「ら」に強勢がおかれ「だからあ」となったり韻律的特徴を伴った場合、常識やお互いの了解事項に照らし合わせれば明らかであったり、1度言ったのに繰り返し説明しなければならないことに対する苛立ちが暗示される。相互作用的には会話の構造上、発話の順番を確保しながら応答するための時間を稼ぐ手段として機能する。

5.7.1 まず、予期せぬ質問を受けた側が自分の知識に照合し適当な答えを探すため、発言権を確保したまま返答のための時間稼ぎをしている会話例が(9)である。表面的には返答という行為を導き、基底的には、話し手の知識に照合中であることを示唆するという行為を導いている。この「だから」は相互作用的な会話の構造上の機能が主で、発言権を確保したまま時間を稼いでいる。

- (8) A: 何が出るの？
B: や、だから何が出るって言われたら、うまく言えないんですよね。なんか、例えばパスタ系統とかね、スパゲティとか、ラザニアとか、ピザとかね。

(8)の「だから」は主に発話確保装置としての相互作用的機能を有しているのがわかる。

5.7.2 次は基底のレベルで、先行文脈に「だから」の前件があることを示唆するという行為を導く「だから」である。

- (9) 徹子: 歌舞伎は、ごらんになったことは.....。
- 杉村: 子供.....。赤ちゃんのときは見ました、それは(笑)。
- 徹子: 赤ちゃんのときにごらんになって、そしてお芝居のお話をお聞きになって、それでどうしてそのとき新劇がいいなあとお思いになったんですか。
- 杉村: そりゃ、あなた、その時分はね、ほかの芸事ってのは、子飼いのときからでなくちゃできないっていわれてた時分です。子飼ってのは、今の歌舞伎の方達、みんなそうでしょう。
- 徹子: ええ、踊りでも、お三味線でもなんでも。
- 杉村: 3つか4つのときからずーっとやっていかなければ、いわゆるそういう芸事をやることはできないっていわれてたでしょう? だから、あたしなんか、女優さんになろうなんてことは夢にも思わなかった。ねえ、20才近くなってね。だから築地小劇場っていうところは、女学校を出て、そしておとなが、今までの芝居と違った、西洋からはいつてきた近代劇をもとにした芝居をするんだから。おとなになった人を養成するところなら、そこへ行こうと思った。どういうわけで行こうと思ったんだかわかんないの、あたし。
- 徹子: なんだかそんなふうにお思いになった。
- 杉村: 思ったんです。
- 徹子: それでとにかくいちばん最初に新劇をごらんになったのはどこだったんですか。
- 杉村: それがね、広島なの、やっぱり。
- 徹子: 広島に来たんですか。
- 杉村: そう。築地小劇場の巡業があったの。
- 徹子: まあ、新劇をやりたい、そう思ってたっしやるところへ、築地小劇場がたまたま.....。初めてごらんになって、どんなご感想?

杉村: だから、あたし、外国人だと思っちゃった、みんな。(徹子の部屋)¹²⁾

このように先行発話「西洋の近代劇をもとにしている」ことから「外国人と思った」が導かれていることを「だから」は示唆している。

5.7.3 次に基底のレベルで、言語的文脈にはない、常識やお互いの了解事項といった共有知識に照合して質問の直前の発話を理解するよう要求する会話例が(11)である。韻律的特徴を伴い、補足説明をしなければならないことに対する苛立ちを含意する場合がある。

- (10) A: みんなで入ろうよ。
 B: 4人で一斉に入んの?
 A: だからあ、順番に。

家族風呂は小さいので4人も1度に入れないというお互いの了解事項から、「1人ずつ順番に入る」のは当然という含みがAの発話に表されている。

5.7.4 最後に、基底のレベルで直前の発話を理解するよう要求する際に用いられる「だから」で、談話標識の後繰り返し同じような表現が用いられ苛立ちが暗示される会話例である。

- (11) なおこ: やっぱりついていく。
 美津子: ダメよ。仕事の話だから。
 なおこ: 誰なの?
 美津子: だから仕事の仲間。

(生きてみたいもう1度——新宿バス放火事件)¹³⁾

この「だから」は返答の冒頭に用いられているという意味では上記の3つの「だから」と同じであるが、質問の直前の発話を美津子が「だから」の後繰り返し返すことによって苛立ちが表現されているという意味においては、**5.8**の理解要求を導

¹²⁾ 黒柳徹子(1985)『徹子の部屋』朝日新聞社

¹³⁾ シナリオ作家協会編(1986)『'85年鑑代表シナリオ集』映人社

く「だから」との区別はつけがたく、「だから」の多機能的な側面を示しているといえる。

返答を導く「だから」は上記のとおりいくつかの下位区分できるが、いずれも言語的または非言語的文脈に「だから」の前件があることが示唆されるので、話者なりの論理関係が反映されている。

5.8 理解要求を導く「だから」

表面的には直前の発話を繰り返したり、または、遂行中の行為を言語化して説明を行ない理解を要求するという行為を導くが、深いレベルではそうしなければならないことに苛立ちを表明するという基底的行為を導く。相互作用的には会話の構造上、発話の順番を確保する手段として機能する。また苛立ちを暗示しているのは韻律的特徴からもわかることが多い。

- (12) 母: 教えてやってちょうだい。全然わかってないらしいの。
 ヤエ子: だ、だ、だってだって、いくらなんだって、どうしてなのっ!
 母: だから教えてやってよ。 (おもひでぼろぼろ)¹⁴

- (13) A: 真理さん、宿題やっときなさいよ。
 B: だから、今やってるところ。

(12)は同じことを繰り返さなければならないことへの苛立ちを、(13)は宿題をしているという行為をわざわざ言語化しなければならないことへの苛立ちを含意している。(12)は「A だから A」というトートロジーで、(13)も「宿題をしている(行為)のだから宿題をしている(言語化)」というトートロジーに近いものと考えられる。したがって双方とも話者なりの何らかの論理関係を反映しているといえる。

6 まとめ

前節の前半が意味論的機能を持つ「だから」についての分析で、全て談話標識の前の命題内容から後続の命題内容が導かれるという論理関係を表している。そ

¹⁴シナリオ作家協会編『'91年鑑代表シナリオ集』 映人社

の関係というのは原因から結果¹⁵⁾ 以外に、具体例から一般化、一般的から具体化というように、「だから」の前件の命題から後件の命題が導かれるというものである。

前節の後半では、命題同士の関係というより、発話行為同士の関係や会話の構造上における相互作用的機能といった観点から、語用論的機能を有する「だから」を分析してきた。しかし命題の意味と全く無関係かというそうではなく、前件から後件を導くという論理関係は根底に残されている。このような論理関係といった命題の意味が保持される理由は、語源的なものからと考えられる¹⁶⁾。

本研究の分析結果をまとめると表1のようになる。

「だから」は多機能的な談話標識で、8つのカテゴリーのうちの1つに1対1に対応するとは限らない。また8つのカテゴリーも絶対的なものではなく、あくまで筆者の枠組みで行なったものであるので、分析の視点を変えることによって流動する可能性のあるものである。本考察では「だから」だけに焦点を会わせて分析したが、他の日本語の談話標識との比較が必要なことはいうまでもない。「だから」と典型的用法が同じ接続詞の「したがって」「ゆえに」「よって」などは用いられる使用域が「だから」とは異なるので、用いられる談話タイプが異なることは明らかであるが、話しことば特有の「それで」「で」「じゃ」などとの違いを探ることが「だから」の機能を明らかにする上で特に重要と考える。本考察は談話標識についての研究の第一段階と位置づけ、他の談話標識との比較分析のためにも統合的なモデル設定を今後の研究課題としたい。

¹⁵⁾ 結果を導く以外にも多くの機能があるが、人為的会話データを除いて実際の会話データ(100以上)だけで各機能別にその数を見ても結果を導く「だから」が約40%と頻度が高い。統計的数値については詳しくは谷崎(1992)を参照。

¹⁶⁾ 「だから」は助動詞「だ」に接続詞「から」が付いた語であるが、接続助詞「から」は元は格助詞「から」が転用されたものである。格助詞「から」は起点を表し、「だから」も根源的には格助詞の意味を有していると思われる。つまり前件を出発点とし、後件へつながるといふ何らかの論理関係を表すのである。したがって5.4から5.8の「だから」は全て、言語的文脈に現われているとは限らないが、非言語的文脈も含め、文脈にあるものを前件とし、そこから後件が導かれるという話者なりの論理関係を根底に保持している。

表1 「だから」の機能

語用論的機能が中心の「だから」について、(a)-(d)は次のものを表す
 (a)表面的行為 (b)基底的行为 (c)相互作用的功能 (d)根底にある命題

だから		
意味論的機能	1. 結果・結論を導く	
	2. 一般化を導く	
	3. 具体化を導く	
語用論的機能	4. 結論の明確化要求を導く	a.結論の明確化要求 b.反発や挑戦の態度表明 c.発話確保装置 d.論理関係
	5. 省略された結論を導く	a. 結論を省略し、発話を中断 b.ためらいの態度表明や話の引き継ぎ要求 c.発話移行装置 d.論理関係
	6. 推論した結論を導く	a.推論した結論の確認 b.協力的態度表明 c.発話移行装置 d.論理関係
	7. 返答を導く	a.返答 b.話し手の知識に照合中または共有知識に照合することを示唆（場合によっては苛立ち表明） c.発話確保装置（発話の順番を確保し時間を稼ぐ） d.論理関係
	8. 理解要求を導く	a.先行する発話行為を繰り返し、または遂行中の行為を言語化して説明し、理解を要求 b.苛立ち表明 c.発話確保装置 d.論理関係

主な参考文献

- Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Blakemore, D. (1987) *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Brown, G. & Yule, G. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cole, P. (1981) *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press.
- Grice, H. P. (1981) "Presupposition and Conversational Implicature," in Cole (1981:183-98).
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
- 蓮沼昭子(1991)「対話における「だから」の機能」『姫路独協大学外国語学部紀要』
4
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Maynard, S. K. (1989) "Functions of the Discourse Marker *Dakara* in Japanese Conversation," Text, 9, 4, 389-414.
- Sacks, H., Schegloff, E. and Jefferson, G. (1974) "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation," *Language*, 50, 696-735.
- Schiffrin, D. (1987) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schourup, L. (1985) *Common Discourse Particles in English Conversation: Like, Well, Y'know*. New York: Garland.
- Stubbs, M. (1983) *Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*. Chicago: University of Chicago Press.
- Searle, J. R. (1969) *Speech Acts*. London: Cambridge University Press.
- 津田 葵 (1989) 「社会言語学」柴谷方良・大津由紀夫・津田 葵『英語学の関連分野』(英語学大系 6) 東京:大修館 365-495
- Van Dijk, T. A. (1979) "Pragmatic Connectives", *Journal of Pragmatics*, 3, 5, 447-57.